

上岡弘二先生を偲ぶ

山内 和也*

Obituary of Professor Kouji KAMIOKA

Kazuya YAMAUCHI

2024年1月7日、イラン学の研究において大きな功績を残された東京外国語大学名誉教授の上岡弘二先生がご逝去された。85歳であった。イランとイラン学への熱い情熱を持ち続け、情熱と好奇心に溢れるとともに、穏やかな人柄で誰にも愛された先生であった。上岡弘二先生は日本西アジア考古学会の設立時からの会員で、1997年1月19日（入会日）からご逝去されるまで（退会日は届をいただいた2024年1月10日）、日本西アジア考古学会の活動に対して変わらぬご支援をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

上岡弘二先生は、1938（昭和13）年11月19日、京都府相楽郡加茂町（現在の木津川市）に生まれ、1961年京都大学文学部梵語学梵文学科を卒業された。1972年からは東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に就職され、イラン学の研究に邁進された。1991～1994年には同研究所の所長を務められ、2004年には定年退官された。また、日本オリエント学会では会長および顧問を歴任されている。

上岡弘二先生は、それまでのイラン学や言語学という既存の研究分野にとらわれず、つねに新しい視点で、そして幅広く、強い好奇心を持ってイランの研究を行っていた。その一つの大きな成果が、1999年に河出書房新社から出版された上岡弘二編『暮らしがわかるアジア読本 イラン』であった。この本は上岡先生が見てきた、そして感じてきたイランを広く知ってもらうために編集された本である。厳しい国際情勢の陰に隠れて、あまり知られていない、あるいはわかりにくい、ちょっと怖いと感じてしまうイランを、研究者でありながら、親しい隣人、あるいは友人としての視点から編んだ本であり、現在に至るまでイランを知るための本として高く評価されており、イラン関係の概説書としては私自身がもっとも好きな本である。

退職されてからもイランの研究をお続けになり、その成果は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所から『ギーラーン州の聖所Ⅰ』（清水直美・吉枝聡子・上岡弘二、2014年）、『ゴム州の聖所』（清水直美・上岡弘二、2011年）、『テヘラン州の聖所』（清水直美・上岡弘二、2009年）として出版されている。上岡先生は各地に残された「聖所」に着目し、その研究を通じてイランのイスラーム化以前にイランおよび

その周辺地域で広く信仰されていたゾロアスター教や民間信仰の名残り、あるいはイスラーム化以降に広まった、ある意味「イラン的」であり、イランの過去と現在を繋ぐイスラーム教シーア派の信仰の関係性を解明・理解し、さらにはイラン人とイラン社会を通時的に見つめようとしていたのであろう。

研究者として活動に加え、上岡先生は写真家としての側面もお持ちであった。とても写真がお好きで、かつ腕前もプロ級で、写真の個展を開くほどであった。調査に赴いた土地に住む人たちの表情を優しい目線にとらえた写真が多く、これらの写真は人を愛し、人に優しい上岡先生の人柄を偲ばせるものである。上岡先生の写真のコレクションがいかほどであるかはすべてを拝見したことはないものの、あるとき、どのぐらいお持ちなのかをたずねたことがある。そのときのご返答は「自分が撮影した写真をもう一度見返すことができないほどたくさんあるよ」というものであった。

私と上岡弘二先生の出会いについての記憶はすでに朧気となってしまったが、私が大学院修士課程の頃であったと思う。当時、イランへの留学を目指していた私は、上岡先生の研究室を訪ね、留学についてのご相談にのっていただいた。そのとき、のちにテヘラン大学で私の指導教員となるタファツゾリー教授をご紹介いただいた。私は勧められるままタファツゾリー教授に1枚のごく短い手紙を送ることになったのだが、実は、この手紙がきっかけとなって私のイラン留学が実現することとなった。私にとってはイランへの窓口を



*帝京大学文化財研究所

Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University

西アジア考古学 第25号 2024年 123-124頁 ©日本西アジア考古学会

開いてくださったのは上岡先生であり、そのご恩には感謝してもしきれないほどである。その後、頻繁に研究室を訪れることとなり、お酒を飲みながら、先生からイランや研究の話をうかがうことができたことは、その後の私の人生に大きな影響を与えるものであった。さらには、テヘラン大学留学中であっても、上岡先生は自ら重要な文献をコピーして送ってくださるなど、上岡先生のご支援を受けられたことで、無事にテヘラン大学大学院修士課程を卒業することができた。

私がテヘラン大学に在学中には、上岡弘二先生や家島彦一先生によるイラン南部の調査に参加する機会を与えていただいた。この調査は、私にとって上岡先生とのとても大切な思い出であるだけでなく、またその後の私の研究の方向性を考えるうえでも貴重な経験となった。先生方と一緒にイランのザーグロス山脈越えのルートの調査を行なったが、これは過酷ではあったものの、実りの多い調査であった。早朝に出発して、現地で調査し、さらに夜道を車で走って深夜に宿舎に戻るといふことの繰り返しで、私はまだ若かったのでさほど苦にならなかったものの、上岡先生たちのエネルギーには驚かされるばかりであった。このとき初めて人が往来するルートを広範囲に調査することができ、イランという世界を深く知るきっかけともなり、現在行なっているシルクロードの調査研究のきっかけともなった。

他方、イランを愛する上岡弘二先生にとってはつらい出来事もあった。それはイランの空港での入国拒否と国外退去というものであった。当時、イラン人が査

証免除で渡航できる国が限られており、仕事を求めて数多くのイラン人が日本への渡航を目指しており、日本への入国拒否や国外退去を強いられるイラン人も少なからずいた。上岡先生に対するイランへの入国拒否はその報復措置であったようだ。当時、私は在イラン日本国大使館で専門調査員として勤務しており、どうにかできないかと努力はしたものの、残念ながら早急な解決は難しく、その措置が解除されるまでにはかなり長い時間がかかってしまった。それまでのご恩に報いる機会であったにもかかわらず、お手伝いができなかったことはいまに至るまで悔やまれる。

その後、上岡先生は研究をやめることなく、パキスタン北部にフィールドを移して、新たな研究に取り組んでいくこととなったようである。本稿に掲載した写真はその時の写真で、ご遺族の方々からご提供いただいたものである。

上岡弘二先生にさいごにお会いしたのは2023年11月29日のことであった。ホスピスに入院されていた上岡先生をお尋ねし、ご挨拶はできたもののおかげんはあまり芳しくなく、これがさいごとなってしまった。

上岡弘二先生のご蔵書については、部分的ではあるが、私が引き取らせていただき、研究室の書棚に並べてある。それを見るたびに上岡先生のことを思い出されるとともに、上岡先生のご興味やご関心の広さに驚かされる。既成の概念にとらわれず、新たな研究を目指していた上岡先生の思いを表わすものであろう。

上岡弘二先生、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。